

Title	中国の国語教育
Author(s)	高倉, 克己
Citation	語文. 7 P.45-P.47
Issue Date	1952-11-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68416
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

中国の国語教育

高倉克己

民国以前の中国の国語教育に就いては、語るべき多くのものを持たぬ。恐らくは極く少数の人々を対象として、三字經（上大人。孔乙己。等のようなもの）又は、千字文等を手がかりに四書五經等のむずかしい文語文を教えていたものであらう。それは全く、国語教育としての意識に基づいたものではなく、たゞ、個人の立身出世の爲のものが主であつたらう。

中国に於て、国語教育が問題として取り上げられるに至つたのは、清朝末期から民国初年にかけての事であつて、それは西洋諸国の文化と接觸して中国の在來の文化が如何に遅れたものであるかを悟り、急に開化の道に進まんとした頃より始まる。然し具体的に国語とは如何なるものか、又その国語の教育には如何なる方法がとらるべきかに就いては、最初ははっきりしなかつた。そのやゝ具體的な形をとるに至つたのは一九一七年（民国六年）胡適等を中心とする文学革命運動以後のことであつた。仮りに此の一派を国語運動派と名付けておこう。此の人達の考えるところは、先づ中国を進歩向上させる爲には、思想感情を伝達する用具であるところのことを整理統一し、全国如何なる地方の人々にも、理解される様なものを作らなければならない。即ち、所謂「国語」を建設せねばならない。では其の国語とは、如何なるものかとい

うに、我々が日常生活に使用するところの言語であることが望ましいと言うのであつた。然し日常使用する言語といつても種々方言の多い中国のことであるから、いづれの地方のことを基準とすべきかについて、にわかに決しかねたが結局のところ北京語を標準とすることになつた。

以上の如き国語運動派は進歩的な知識人、留学歸りの青年層等の絶大な支持をうけたが、如何なる運動にも反対者は必ずあるもので、殊に中国の場合の如く、數千年の古い伝統を持つた古文に對する絶対的であるといつてもよい尊敬の念、これをかなぐり捨て、日常口頭のことばを国語として普及せよといふが如き主張が、そう順調に賛成者ばかり獲ち得て進むわけにはいかない。果せるかな、古文崇拜者を中心とする人々の間から、いやしい町の物売りのことば等を真似することは絶対にならぬ。と強い反対ののろしが上げられた。しかしながら国語運動派の人々は決してこれにひるまなかつた。折も折、我々が日常話すことばにかなり近い体裁で實際に小説を書いて、国語の生きた見本を示した人があつた。これ即ち魯迅である。理論と實際との合致によつて、国語運動派が勝利を占めることは当然である。

斯くて政府は一九二〇年一月、先づ小学校の一・二年生よりその

教科書に国語を用いるよう全国に訓令を発した。勿論古文も若干は行われたが、低学年に於ては専ら口語文の教材がとられるようになったのである。これで中国の国語教育は、一応形を整えたと考えられるであらうが、如何にも、漢字を以て書き表わされた教科書の表面を見ただけでは分らないが、試みに北京の小学児童と蘇州の小学児童をして、同じ教科書の同じ部分を読ませて見た時に、これが同じ文章だらうかと誰しも不思議に感ぜざるを得ない。それは、いうまでもなく、あの広い中国各地方毎に相違する「方言」のためである。これを整理統一することは容易ではない。中国に於ても、前にふれた胡適等とは別に国音統一の運動が熱心に続けられ、その為に中国の標準音を表わす為の発音符号まで發明された位である。新しい口語文を採用した教科書には、此の発音符号を漢字に添えて、其の標準音を表わすという頗る行きとどいた方法が用いられた。「方音」の統一はなかく、完全には實現できなかったが、口語の普及は年と共に進み、中国の文章を読める人をだんだん増加せしめてきた。これは大いに注意すべき現象であつたのである。

舞台が大きく動いて、中国本土は人民政府が統治するようになった。話は少し前にもどるが、以前からソ聯と往来交渉のあつた中国人等の間で、中国の進歩の為のガンである漢字を廢止して其の代りにローマ字を以て表記すべし、といふ意見があり所謂ラテン化運動として、一部にかなりやかましく言われておつた。

人民政府の成立するや、当然此のラテン化運動は大きく取り上げられ、色々と研究が重ねられてゐる。今日普通の中国の印刷物等はまた此のローマ字によつてはいないが。

一方、人民を対象とする政治を進める当然の結果として、人民の教育の為に正しい国語を普及させ、地方の文盲にも最低限に必要な文字を教えようとして、各種の行き届いた方法が講ぜられている。更に又、指導的地位にある年若い幹部達には、どん／＼文章を書かせ、どん／＼文章を読ませ、国語教育を普及せしめると同時に向上せしめんとする努力も非常に強力に推し進められてゐる。最近の中国の国語教育の大きな問題は、人民政府成立以來、非常に多くの青年が筆を取り、自分の思いをどん／＼書き表わしていく結果、時としては、思想としても文章としても未熟なまゝが発表されたりして困る。どん／＼書くのはよいが、如何にして正しく書かれるか、書く人の余りにも多くしてこれを正しく修正してやる人の少きを歎ずるといふ嬉しい悲鳴さえあがつてゐる。新聞・雑誌・ラジオあらゆる機関を利用して「祖国のことは正確に使い、ことばの純潔と健康とのためにたゞかえ」というスローガンを掲げて努力しているが如き状態である。

一九五一年十月人民政府は学制改革を發表した。これによると小学校教育は従來の初級四年、高級二年、計六年を改めて五年制一本とした。その理由は今までの制度では稍々もすると初級四年のみでやめる者があつたのでこれを防がん為である。此の新学制に於て特に我々の注意をひくものは、小学校より中学校に至る間に普通の小学校以外に種々の特別な学校が設けられている事である。それらは児童のみならず、すでに社会人として働いてゐる成人をも教育の対象としたものであり、従つてその授業は夜間その他の余暇に於て行われるようにしてある。そしてかゝる学校と普通の昼間授業の学校の卒業生はそれぞれ同等の資格を得るも

のであって、上級学校へ進まんとする場合は、何れへなりと己の好む方へ行く事が許されている。更に又農村等に於て農閑期を利用する短期教育も新学制の一環として、とり上げられている。これらはすべて中共が奥地に於て実際に試験すみのもののみであって、新学制はたゞこれを法文化したまでである。かゝる新学制の下に実施されつゝある小中学校の国語教育の実際は如何ようであらうか。未だその結果を見るに足る資料は見えていないが、人民政府の手によって編纂された国語教科書についてこれを見るに、その体裁はかなりお粗末なものであるが内容は著るしく新しい。戦争中及び戦争以後に於て名をあらわした新進作家の作品はもとより甚だしきは無名作家の手になる文章までも、苟しくもその内容が、新しい社会にふさわしいものなれば思いきつてとり入れられている。毛沢東のものを始めとし政治的色彩の強いものが多いことも目立つ。従来の文学的文学作品が中心であったものに較べると非常な相違である。戦前の作家の作品にして採録されているものは魯迅等、極く少数の人々に限られて居る。文語文は書く事は要求されず、たゞ読めればよいので中学の上級に於て始めて課されて居る。全体としてその内容は稍々雑然として居るがしかし極めて新鮮である。かゝる教科書を教えさせられる教師はなか／＼容易ではない。時としては自分の思想では扱つかい兼ねるものもあり、生徒達の反撃に苦しむ事さえあるという。これが為か教材研究も極めて盛んでこれに関する雑誌類も種々出ている。これらの新しい文章は先に述べた「祖国のことばを正確に使い、ことばの純潔と健康との為になかえ」とのスローガンに照らして再吟味されるべき部分も若干あるように思われる。台湾の国語教育は少し

も年若き人々にとつては一九四五年以後の事であるので詳しい結果は分らないが、新たに中国語を以て国語とするという一大変革の後であるから其の苦心は並大抵ではなからう。台湾出身の在日華僑の子弟について我々はその一斑を推すことが出来るが、国民政府制定の教科書を見るにこれは印刷は先の人民政府のそれよりは稍々きれいだであるがその内容に至つては戦争以前は我々が見た処の上海版の教科書と殆んど異なるところなく、たゞ今日人民政府に加わつて居る人々の文章が除き去られているのみの様である。実際の教育が如何に行われているかについては私は知らない。

以上求めらるゝまゝに病中強いて稿を成す。

此の問題に就いては倉石武四郎博士著「漢字の運命」(岩波新書)を一読せられん事を願う。二七、八、一七

—大阪市立大学教授—